

陳舜臣さんを語る会通信

NO.41 Jul. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年7月10日

昭和45年度日本推理作家協会賞受賞作『玉嶺よふたたび』『孔雀の道』

本41号では推理小説2篇、『玉嶺よふたたび』と『孔雀の道』を取り上げます。陳舜臣さんは、昭和45年、この2篇で、日本推理作家協会賞を受賞しています。前者は、『オール讀物』昭和42年7月号に発表された中篇「玉嶺第三峰」を原型として、書き下ろしで長篇化されたもので、後者は、陳舜臣さんの初めての新聞小説で、昭和43年5月から神戸新聞など「七社会」系の地方紙に連載されました。(編集委員 橋雄三)

『玉嶺よふたたび』●主な登場人物&歴史背景

●入江章介 東洋美術史を専攻する大学教授。戦時中、二十代の後半、中国の玉嶺(架空の地名)で過ごしたことがある。文革期、二十五年ぶりに訪中団の一員として同地を再訪するところから物語は始まる。

■入江が始めて訪れた頃の玉嶺付近の治安 一応、日本軍の控制下にはあったが、親日汪精衛政権、抗日ゲリラ、中国の正規軍でもゲリラでもない忠義救国軍など、入り乱れての争いが続いていた。

●三宅少尉 日本軍瑞穂駐守備隊長

●スリーピング・ドラゴン(臥竜指令) 抗日ゲリラの隊長。神出鬼没、豪胆無比、そのうえ教養があり、英語をたくみに話す。

●謝世育(しゃせいいく) 汪精衛政権の手の者。

●李東功(りとうこう) 科挙の進士を出した家柄。知識人。

●玉嶺の磨崖仏に詳しい。

●李映翔(りえいしょう) 李東功の姪、十九歳。玉嶺五峰の近く、入江がしばらくの逗留を乞うた李東功宅の同居人。玉嶺第三峰の絶壁に彫られた仏像の唇に朱を入れる十年に一度の行事、「点朱」を行う。

■入江の再訪時 新中国は文化大革命の最中であつた。

●周扶景(しゅうふけい) 入江と同年配。瘦せぎすで色の浅黒い精悍そうな人物。無口で愛想がない。文革期、再訪した入江に玉嶺まで同行。

文庫本のキャッチコピー

ふたたび玉嶺へ行ける！すべてを捨て、日本人であることさえも忘れさせた映翔にまた会える。焼けつくような恋の思い出に、入江の心ははやっていった。25年前、玉嶺第三

峰の磨崖仏の点朱(仏の唇に朱を入れる行事)の日だった。高い檜の上にのぼった映翔の美しい姿が入江の脳裏に、いまあざやかによみがえってきた。

そのころ、玉嶺は日本軍の占領下にあつた。日本人の命を狙うゲリラが暗躍する危険な大陸の片田舎で、日本人と中国娘のはげしい恋の出会い。25年間の空白が、情熱を秘めた映翔の過去をふたたび入江の心に深く刻みつけた！著者最高の長編推理roman。

文庫本の解説(権田萬治)

陳舜臣の推理小説の魅力は、その作品の根底に秘められた、典雅なromanチズムである。激しい情熱を燃焼させようとする人間が現実の壁にぶつかり、傷つき、苦悩する姿がしばしば氏の作品に描かれるが、そういう人間の悲劇的運命を見詰める氏の視線は限りなく優しく共感に満ちている。典雅なromanチズムという意味は、そういう燃えあがるような情熱を作品の中ではきわめて抑制した形で表現し、作品が古典的な格調を保っているからである。(中略)

「玉嶺よふたたび」は「孔雀の道」と合わせて推理作家協会賞を受賞したが、「孔雀の道」よりも私ははるかにこの「玉嶺よふたたび」の強烈なromanの香りにひかれる。

戦時中も、軍隊よりも中国の民衆に共感をおぼえていた入江の悲劇的な恋の意外な結末が、終わり近くになって明らかになるが、犯罪が描かれていながらこんな後味のよい推理小説はないと思う。



角川文庫表紙

本棚にある一冊。発行は昭和52年。小口だけでなく、頁の中まで日焼けしている。陳舜臣作品の最初期の蔵書で、懐かしい。

「士は己を知る者のために死に、作家は己れを認める者のために書く」

双葉文庫『孔雀の道』山村正夫氏の「解説」から

双葉文庫、日本推理作家協会賞受賞作全集24『孔雀の道』巻末、山村正夫「解説」から引用します。『孔雀の道』の解説ながら、「氏に関しての忘れられない思い出」として語っています。傍線は編集委員の加筆。

昭和38年7月下旬のことです。

陳氏から一通の手紙を受け取った。

内容は便箋四枚にわたる、懇切な釈明文だった。氏が某誌から執筆依頼を受けた百五十枚の中篇を、いったん引き受けはしたものの、稿料が他の中堅クラスの作家の三分の一であることがわかったため、その差別に我慢がならず、執筆拒否を編集部に申し入れたので、了承してほしいという文面である。

陳舜臣氏が山村氏に釈明文を送ったのは、某誌の編集長に陳氏を紹介したのが山村氏であったからだ。

私には陳氏の立腹の真意がよく理解できた。

氏が駆け引きはもとより、原稿料の額そのものにこだわっているのではないことは、もちろんである。立腹の原因は作家としての過小評価の点にあり、それを許せないとして、そのような申し出をしたようだった。(中略)

とりわけ次のような最後

の文面に、私は深い感動を覚えた。

「かけ出しのくせに思いあがっているとお思いかも知れませんが、小生士は己を知る者のために死に、作家は己れを認める者のために書くと思っております。三分の一に評価されたと知った以上、どうしても書くことができないのです。(中略)

もし、どうしても貴兄の顔がお立ちにならない場合は、いつでも貴兄宛に原稿をお送りして責任をとるつもりでいます。(百五十枚の原稿はすでに書きあげてあります)その場合、稿料なしということにしてください。たいと存じます。小生稿料の額そのものではなく、三分の一という不当評価を問題にしているのですから、タダの寄贈原稿となれば評価云々の問題もおこらず、サバサバすると思いませんので」

このエピソードは陳氏にとつてはよくよく腹に据えかねたことだったに違いない、ふだんは推理作家の中で氏くらい、人との争いを好まぬ鷹揚で温和な人物

もいなかった。

英語・インド語・ペルシャ語・福建語・北京語などに通じた、推理文壇一の知識人としての教養がそうさせるせいもあるのだろうが、いつ会っても大人然としたその温容に、微笑の絶えたことがないのである。

■「士は己を知る者のために死す」

陳舜臣さんの好きな言葉のようです。司馬遷の『史記』「刺客列伝」の豫讓伝や、聶政伝にこの言葉が見えます。陳さんにも、『中国任侠伝』、『続・中国任侠伝』があります。任侠といえは、ヤクザを連想しますが、ここで俠者とは、他人のために、自分の身をかえりみない者のことです。

陳さんは、上記二作品の最初に荊軻を置いています。



双葉文庫版表紙

テレビで放映された『孔雀の道』

『孔雀の道』は、NHK「銀河ドラマ」枠で1970年6月22日～6月26日、全5回、放映されました。

陳作品『孔雀の道』が原作とはいえ、相当、ストーリーが違ってきます。テレビドラマのキャッチコピーです。

日英混血のヒロインと日本人青年の宿命的な出会いと結びつきを通して、暗い戦争の傷跡が浮かび上がってゆくサスペンスドラマ。

女子大の英語講師として13年ぶりに来日したローズ・ギルモアは、興信所調査員の中垣とふとしたことで知り合うが、ローズの父は戦時中、英国人の二

重スパイ、中垣の父はそれをネタに脅迫した日本軍憲兵中尉であった。そして中垣の父は23年前、ローズの父に殺されていた。その真相を解き明かそうと当時の関係者を訪ね歩くうち、2人は否応なしにどす黒く複雑に絡み合った人間関係を知ることになる。

[キャスト]

ローズ・ギルモア …… 村松英子 (上の画像)
中垣照道 …………… 川津祐介
ランポール夫人 …… 月丘夢路
島田記者 …………… 江守徹



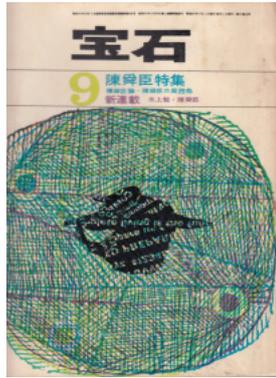
陳語録 「犬より猫が好き」「歌舞伎は嫌い」「中国 デリケートな問題 一口では…」

『宝石』昭和38年9月号掲載、「ある作家の周囲—陳舜臣篇」より抜粋・転載します。これは、安西晴衛氏が、神戸市生田区北野町1-31にあった陳舜臣宅を訪れて取材、執筆した記事です。

生い立ち

<本籍>

台湾。台北のはずれに、新莊という小さなまちがあります。観音山がみえるところです。「怒りの菩薩」でつかった菩薩山のイメージは、この観音山です。台湾に移るまえは、福建の泉州。そのまえ、つまり陳姓の故地は河南のえいせん 潁川です。祖父の墓には三十三世とあり、ぼくらの代は三十五世になりますが、族譜(系図)によると、遠祖は陳寔ちんしよくということ。■正しくは、祖父は三十一世で、陳舜臣さんは三十三世。



推理小説を語る

<江戸川乱歩賞受賞前後>

一生懸命に書いた五〇〇枚の原稿「枯草の根」を締切りまぎわに、あわてて郵便局に持っていったら、日曜日で午前までだった。重たい原稿を持って帰ったのを覚えている。

東京の選考委員会から受賞を知らせる電話を受けた。うれしかった。これから書いていかなければ…。書けるかなあ、とも、書いてみせるぞ、とも思った。

<登場人物>

ぼくはからだ小さく、すぐに骨折をするし、ケンカには弱い。その反対の理想像を主人公にするのです。陶展文がそうです。

登場人物には愛情をもちます。どんな極悪人にも愛情をそそぐのは、「史記」の伝統です。人間に絶望しないということですね。絶望した人は、未練たらしく小説など書かないで、いさぎよく青酸カリを仰いで死んでしまえばいいのです。

<スパイものは>

スパイものはあまり書きたくない。男子たるものは、食いつめたときにしか、スパイになるべきでない。わびしいものだ。そんなわびしいものは書きたくない。

もし、スパイものを書くとしたら、スパイを動かす、根源のあらそいを書きたい。

<好きな自作>

やはり、受賞作の「枯草の根」が一番思い出が深い。短編では「方壺園」「九雷溪」の二つ。いずれ

も、モデルにした人物に傾倒しているからです。

生活の周囲

<観劇>

演劇 — 観るのは好き。

ただし、歌舞伎はきらいです。世襲制度のわざら反感をもちます。人間として、自分の意思で選んだ仕事のうちこむことが貴いのです。世襲は、どんなに美しくても、人間的ではない。



<動物>

動物は好きです。今は伝書鳩を、四十羽ぐらい飼っています。犬と猫では、人間に尻尾をふる犬より、傲岸な猫のほうが好きだ。

その人間像

<尊敬している人>

司馬遷。魯迅。

尊敬と好きとはちがいますね。たとえば、詩人でも尊敬するのは杜甫だが、好きなのは李賀です。近代の中国人では郁達夫とか、政治的になるまえの聞一多の詩 — 子供っぽい迷える魂が大好きです。

<中国について>

デリケートな問題だから、一口では云えない。

<神戸を語る>

山あり海あり、美女あり美酒あり、玉に瑕は市民税の高いこと。

自作を語る

「九雷溪」

福建で処刑された瞿秋白くしゅうはくの最期を、これまた私なりに想像を駆って書いた。小説家の生命は、イメージネーションにあると私は考えている。

「怒りの菩薩」

故郷の台湾を舞台にした。菩薩村は実在の観音村がモデルである。

観音村出身の留学生から『拝啓陳舜臣殿』という七十枚の詰問状を受取った。作者の政治意識を弾劾したものである。つらい。エンターテインメントの作品には台湾を使うまい、と、心に誓った。